

【論文】

弥生時代の中国地域における鉄器普及の様相

会下和宏

（島根大学総合博物館）

概要

本稿では、弥生時代の中国地域における鉄器の流通・普及を具体的に明らかにするために、時期ごとにみた鉄器出土集落遺跡の分布と出土鉄器の器種組成・数量の様相について整理した。その結果、日本海・瀬戸内海から各主要河川を遡上するルート、中国山地内陸部の各水系を東西に横断するルートなど、有機的な鉄器流通ネットワークが形成されていたことを認めた。周防・安芸および備中南部・備前では、弥生後期に鉄器出土量が增大していく大きな傾向が認められ、山陰とも共通する。出土量の内訳をみると、周防・安芸および備中南部・備前では鉄鍬の出土比率が高いのに対し、山陰では鍬・刀子などの工具の出土比率が高い傾向が窺えた。そのうえで、山陰と同様に瀬戸内海沿岸の諸地域でも集落における鉄器流通量の増大に呼応して、その流通を掌握した首長の権威・権力が伸長し、区画や埋葬施設・副葬品の内容において卓越性を有する階層上位墓が出現する傾向を読み取った。

キーワード：弥生時代、鉄器、中国地域、集落遺跡、墓制、流通

1 はじめに

弥生時代における日本列島出土の鉄器は、大半が朝鮮半島から舶載され、流通したものと推定されている。したがって、当時の広域流通の具体相やその社会的影響について考古学的にアプローチするうえで格好の素材といえる。

こうした問題意識を念頭に置いて、前稿では弥生時代における山陰の鉄器普及の様相について、時期ごとに整理した（会下2019）。その結果、山陰では、弥生中期後葉から本格的な鉄器の普及が始まり、弥生後期から終末期にかけて鉄鍬・袋状鉄斧・鍬・刀子などが増加していくことが改めて確認できた。しかし、山陰以外の地域における鉄器の様相について、データを明示して比較していなかったことから、山陰の地域性を客観的に提示できたわけではなかった。

また前稿において、山陰では、鳥取市西桂見墳丘墓や島根県出雲市西谷墳墓群など、弥生後期中葉から終末期にかけて大型墳丘墓が造営されており、鉄器普及の途上期にその流通を掌握する首長の権威・権力が伸長したことを推定した。加えて、広域に流通する鉄器の普及と大型区画墓の造営との関連は、山陰以外の西日本各地においても窺えることを指摘した。前稿では、西日本各地のこうした状況について見通しを述べるに留まっていたので、本稿では主に中国地

域を中心に近畿も適宜視野に入れつつ集落遺跡出土鉄器資料を概観し、定量的なデータに立脚しながら、改めて鉄器の流通・普及について整理する。そして、それが墓制などの当該社会における他の要素に及ぼした影響についても考察を加えたい。

2 鉄器出土集落遺跡の分布と流通

まず本節では、鉄器が出土した集落遺跡の分布状況について時期ごとに俯瞰し⁽¹⁾、その流通ルートについても推定していきたい。なお、鉄器出土遺跡の集成にあたっては、川越編2000などを底本とした。

弥生中期中葉まで(図1)

特に、本州島西端部の響灘沿岸や木屋川流域など、下関市域にまとまりがみられる(村田2007)。これより以東では、瀬戸内海側が周防から近畿中部まで、日本海側が石見西部から丹後まで、主要河川下流域ないし臨海部を中心に鉄器出土遺跡が点在する。また、内陸の中国山地山間部においても江の川水系流域の広島県庄原市和田原D地点遺跡、吉井川最上流域の岡山県苫田郡奥津町久田原遺跡・夏栗遺跡で弥生中期中葉の鉄器が出土している。

久田原遺跡・夏栗遺跡のような河川上流域に立地するものは、瀬戸内海側からの鉄器流通とともに、地理的にみて日本海側からの分水嶺を越えた流入ルートを想定させる(佐藤2002)。具体的には、鳥取県側の天神川およびその支流の加谷川を遡上し、人形峠を経て、岡山県側の吉井川最上流域に至るルートが有力候補として想定されよう。

弥生中期後葉(図2)

鉄器出土遺跡が、前時期と比較して大幅に増加しており、鉄器流通の本格化が窺える。日本海側では、伯耆西部の大山北麓・日野川下流域に、瀬戸内海側では岡山平野に比較的濃密な分布が認められる。大阪湾沿岸部・大阪平野・淀川水系流域においても遺跡数が増加している。

内陸の中国山地山間部においても、吉井川上流域の津山盆地および、旭川上流域にまとまった分布がある。この分布域は、吉井川流域と旭川流域という異なる水系をまたがっているが、両水系をつなぐように支流の谷筋を利用して近世の出雲街道⁽²⁾や現在のJR姫新線、中国縦貫自動車道が東西に横断している。弥生時代においても、こうした交通ルートを介した鉄器流通圏が形成されていたと捉えることができよう。また、兵庫県においても近世出雲街道沿いに位置する兵庫県たつの市新宮宮内遺跡・同小神芦原遺跡などから刀子・鉄鏃が出土している。これらは揖保川遡上ルートだけでなく、近世の出雲街道ルートによって津山盆地から鉄器が流入した可能性を示唆しよう⁽³⁾。

また、津山盆地・旭川上流域に流入した鉄器のすべてが、瀬戸内海側から吉井川・旭川を遡上して流入したのではなく、前時期と同様に日本海側からのルートで流通したことも想定しておく必要がある。すなわち、上記した鳥取県天神川から人形峠を越えて岡山県吉井川最上流域に至るルート、および上記した近世の出雲街道ルートである鳥取県日野川から四十曲峠を越えて岡山県旭川支流の新庄川沿い、さらに現在のJR姫新線沿いを経て津山盆地に至るルートである(図7)⁽⁴⁾。

同様に内陸部の備後北部・庄原盆地においても、広島県庄原市和田原D地点遺跡・同大原1

弥生時代の中国地域における鉄器普及の様相

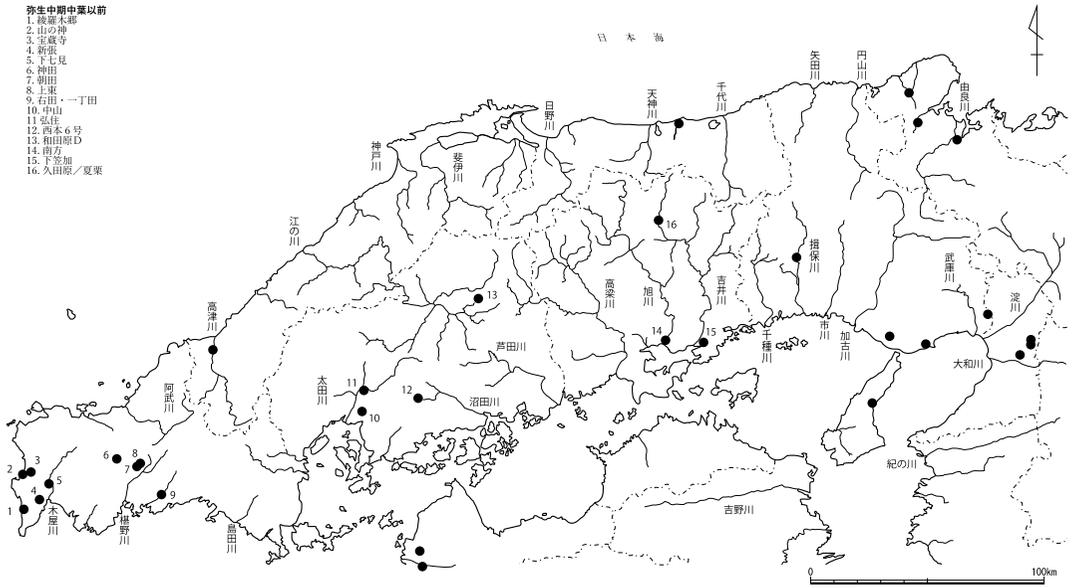


図1 中国地域の鉄器分布(弥生中期中葉まで)
遺跡名は山口県・広島県・岡山県のみ表記。山陰は会下2019と同一。

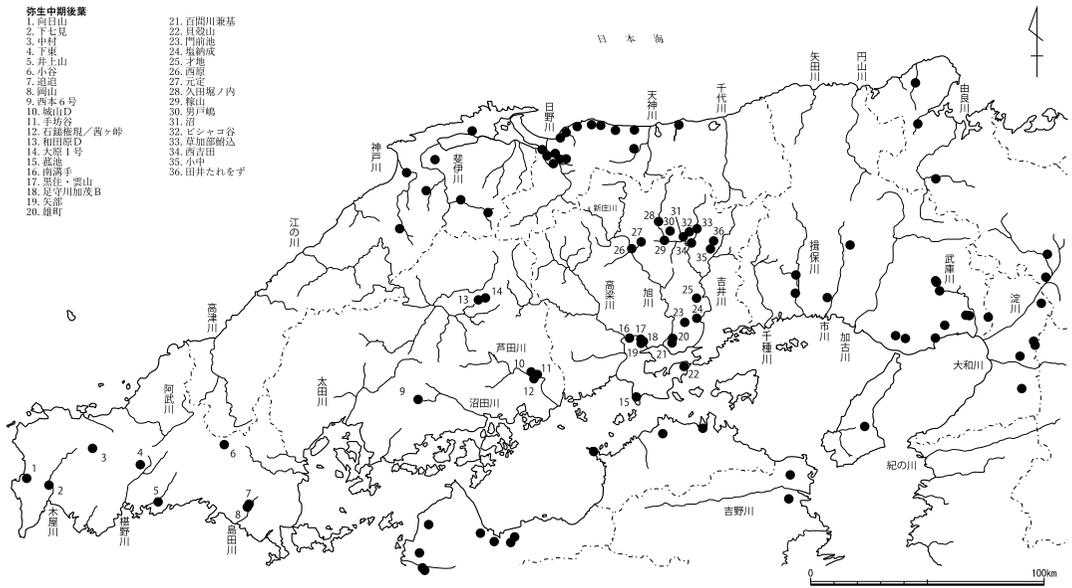


図2 中国地域の鉄器分布(弥生中期後葉)

会下和宏

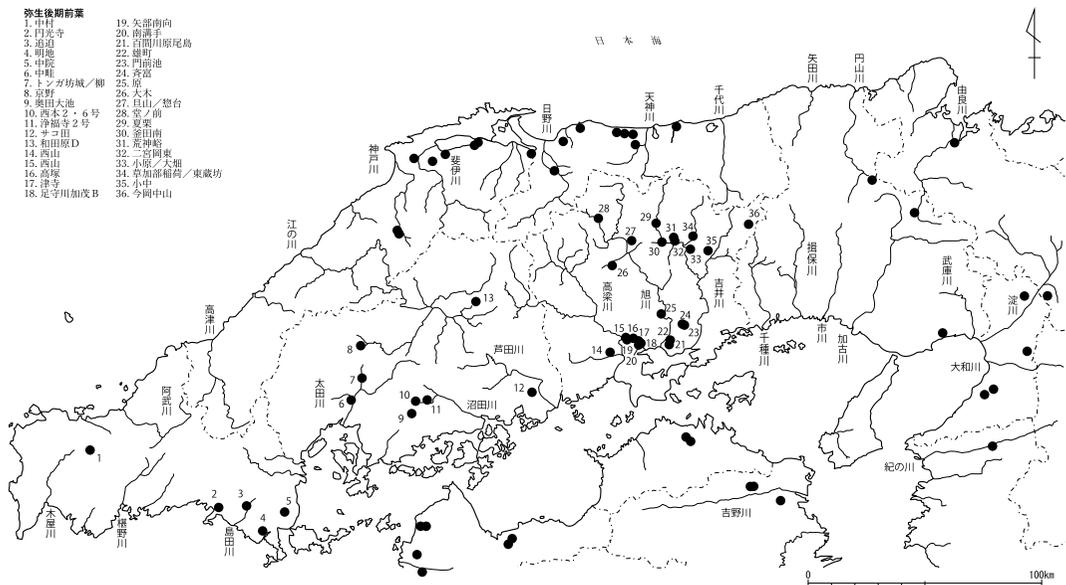


図3 中国地域の鉄器分布(弥生後期前葉)

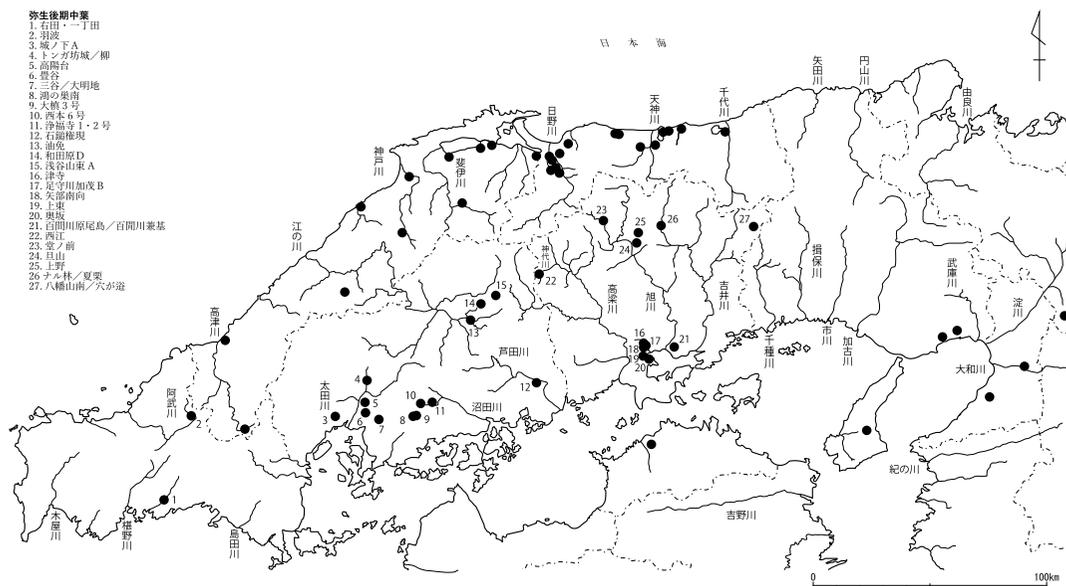


図4 中国地域の鉄器分布(弥生後期中葉)

弥生時代の中国地域における鉄器普及の様相

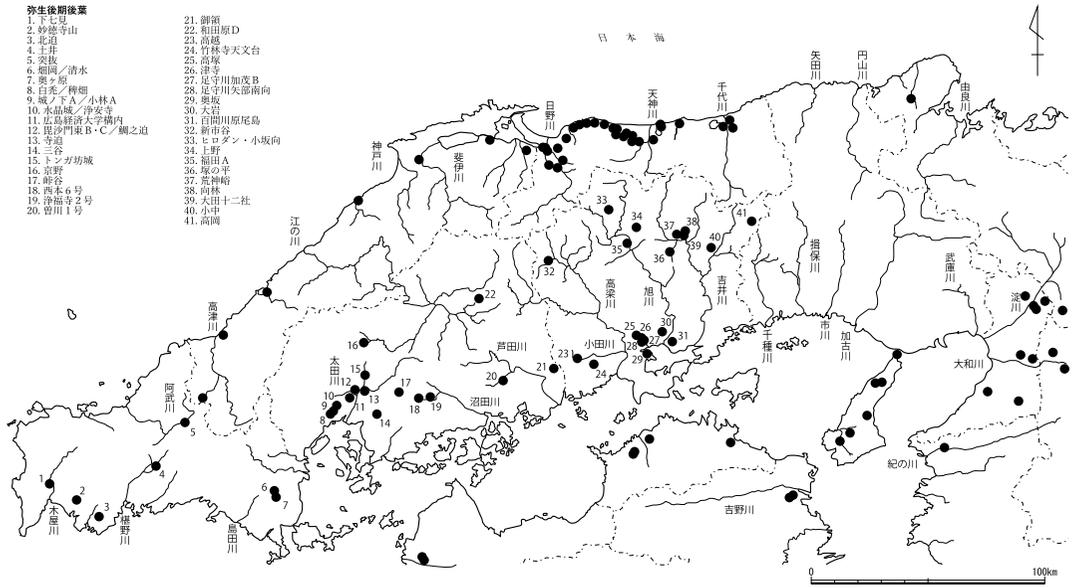


図5 中国地域の鉄器分布(弥生後期後葉)

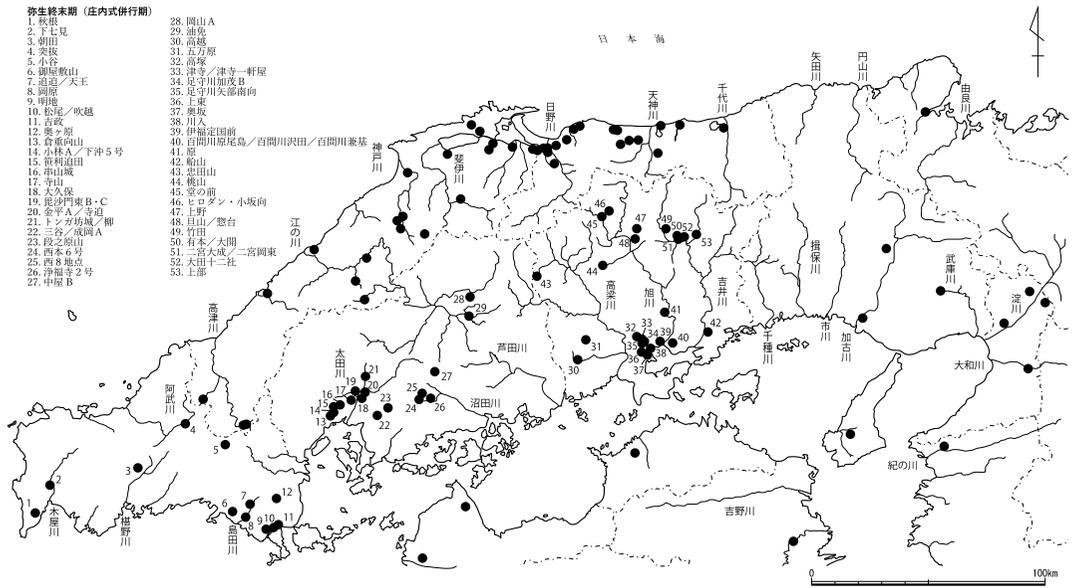


図6 中国地域の鉄器分布(弥生終末期)

弥生後期後葉(図5)

日本海側では、大山北麓で再び濃密な分布がみられるほか、因幡の千代川下流域も出土遺跡数が増加している。瀬戸内海側は、太田川下流域・西条盆地・岡山平野などでひきつづきまとまった分布がみられるほか、高梁川支流の小田川流域にも出土遺跡が現れるようである。分布図からは、太田川下流域から西条盆地・芦田川流域・小田川流域を経て岡山平野へと至る陸路による流通ルートがあったことを示唆する。近畿中部では、淡路島や大阪平野・淀川水系流域などで再び増加傾向にある。

弥生終末期(図6)

ひきつづき、日本海側の日野川下流域・大山北麓、瀬戸内海側の太田川下流域・西条盆地・岡山平野などで濃密な分布が認められる。中国山地山間部では石見の高津川水系最上流域や江の川水系中流域、瀬戸内海側では周防東部の島田川流域やその周辺などで出土遺跡が増加しているようである。この時期における本州島西半部の鉄器出土集落遺跡分布状況を巨視的に俯瞰すると、因幡の千代川と備前・美作の吉井川を結ぶラインを東限にした濃密分布が認められるといえよう。

小結

以上、弥生中期中葉から終末期までの鉄器出土集落遺跡の分布状況を改めて概観してみた。発掘調査の粗密、遺構の残存状況、鉄器の腐食といったバイアスも考慮すべきだが、大掴みに捉えたと、弥生中期後葉頃以降は、日本海側では日野川下流域・大山北麓・天神川下流域、中国山地では津山盆地・旭川水系上流域、瀬戸内海側では岡山平野において、加えて弥生後期前葉頃以降は太田川下流域・西条盆地において、弥生終末期には島田川流域などにおいて比較的濃密な分布が認められる。

弥生時代の鉄器の大半は、朝鮮半島南東部で生産されたものが九州北部を一中継拠点として、本州島に広域流通したとみる考えが有力である。したがって、日本海沿岸部および瀬戸内海沿岸部に立地する遺跡は、主としてそれぞれ西方からの水運による鉄器流通を想定することができる。日本海・瀬戸内海沿岸のこうした集落は港に直結し、水運による別の臨海部集落との中継拠点にもなったと考えられる。

さらに中国山地内陸部の盆地や河岸段丘上に立地する遺跡は、各主要河川からの遡上ルートを通じての鉄器流入を推定することができよう。地理的にみて、三次・庄原盆地は太田川ないし江の川・神戸川・斐伊川、美作は旭川・吉井川ないし日野川・天神川という陰陽の主要河川ルートを遡上する流入が推定できる。鉄器の分布からは、その一方で、備後北部の三次・庄原盆地、備中北部、美作の津山盆地が、現在の JR 芸備線・JR 姫新線ないし中国縦貫自動車道のルートと重なる上記主要河川の支流谷筋ルートを通じて結ばれ⁽⁶⁾、東西を横断する陸運による流通ルートを形成していたことが推定される(図7)⁽⁷⁾。こうした必需品の有機的な流通ネットワークは、おそらく縄文時代の段階から形成されていたものと考えられるが、弥生時代を通じて物流量が飛躍的に増大し、さらに古墳時代やそれ以降も維持されていったと推定されよう⁽⁸⁾。

このように弥生時代を通じて臨海部と内陸部における物流が活発化したことは、日本海・瀬

戸内海に注ぐ各主要河川の河口部ないしラグーン沿岸に立地する集落が、こうした流通に際しての潜在的な優位性を一層高めたのではなかろうか。すなわち河口部の集落は、鉄器のような外部依存物資の内陸部への流通窓口としてこれを半ば差配する状態となり、内陸部集落との交易における交換レートの設定において主導権を握ったものと想像されるのである。特に、岡山平野や出雲平野のように複数の河川が流れ込む場所では、より広域な後背地域を有することになり、物流の要衝としての地位を高めていったであろう。一方で、内陸部の集落は、主要河川遡上ルート以外に上記した各水系を横断する東西方向の陸路など、複数の流通ルートを確認することでリスク分散をはかり、鉄器のような必需品の安定供給をはかろうとしたのかもしれない。

3 鉄器の出土量と器種組成

本節では、中国地域各地における弥生時代の鉄器の出土量と器種組成について時期ごとに整理し、その地域性について明らかにしたい。中国地域における鉄器の普及や器種組成、その地域性の解明に先鞭をつける主な先行研究としては、以下のものをあげることができる。

まず野島永氏は、九州北部と山陽・近畿における鉄器の器種組成や鉋・鉄鎌の地域性について下記のことを明らかにした(野島1993)。器種組成については、弥生後期の山口県玖珂盆地周辺や広島県太田川流域では、鉄鎌・鉋が主体となり、一部刀子や袋状鉄斧が認められ、弥生後期の岡山県百間川遺跡群や近畿では鉄鎌が大半で、一部で鉋がみられる。また、袋状鉄斧がみられる山陽とは異なり、近畿や東海では板状鉄斧が弥生後期以降も存続することを指摘した。さらに鉋を以下の通り分類し、それらの分布状況を明らかにした。すなわち、刃部と身部の区別が不明瞭で刃部・身部とも断面がU字形を呈するA類、刃部と身部が明瞭に分けられており、刃部の断面が中央の鑄によってV字形になり、身部がU字形になるB類、刃部と身部が明瞭に分けられており、身部の断面が矩形を呈するC類に大別する。C類のうち、C-2類は刃部の断面がV字形で鑄が明瞭なもの、C-3類は刃部が鋸状に広がるものに細分される。これらの分布状況をみると、九州北部ではA類・B類、山陽ではC類が主体的に認められ、山陽の中でも山口県玖珂盆地周辺や広島県太田川流域ではC-3類、岡山県百間川遺跡群ではC-2類が多く認められるという地域性がある。鉄鎌では、広島県を中心として無茎三角形式がひろがり、山口県および岡山県南部では柳葉式が主流となる。以上のような地域性から、こうした器種の加工生産が、各地域で行われたものと推定した。

川越哲志氏は、弥生時代の鉄斧について体系的に論じるなかで、板状鉄斧と袋状鉄斧の分布の地域性について下記の通り言及している(川越1993)。すなわち、九州北部では弥生前期後半に片刃板状鉄斧が、弥生前期末に袋状鉄斧が出現するのに対し、中・四国では弥生中期後半に板状鉄斧や袋状鉄斧が現れる。近畿、および中部・東海・関東では、弥生中期後半に板状鉄斧が現れるが、袋状鉄斧は鉄斧の主流とはなっていない。

同様に村上恭通氏も、列島規模での鉄器の様相を通覧するなかで、中国地域について以下の言及をした(村上1998)。すなわち、西部瀬戸内では弥生前期末以降に鑄造鉄器が出現、弥生中期初頭にはその再加工品である板状鉄斧がみられ、さらに弥生中期後葉には鍛造の小型袋状

鉄斧・板状鉄斧が出現する。弥生後期にはいると、袋状鉄斧は大・中・小と大きさのうえで分化が生じ、鉈では身が板状を呈し作業部位が鋤状をなすIVa式が創出される。中部瀬戸内では、斧では板状鉄斧が主体であり、袋状鉄斧は弥生中期後葉以降に出現するものの、身が薄く、袋部の構造も脆弱である。

以上の先行研究は、主に瀬戸内地域を中心に検討されているので、これらを踏まえたうえで、以下では主に器種組成、鉄鏃の形式について、山陰も含めて改めて検討しておきたい。まず、各地域における時期ごとの鉄器の出土点数と器種組成について、所属時期が限定でき、器種が明確なものみに絞ってみていく。図8～13は、器種が明確なものみの点数をグラフ化しており、その他としたものには、鉄剣・鉄刀・ヤス・釣針などが含まれるが、小型の針状鉄器・棒状鉄器・板状鉄片などは含めていない。

長門での出土点数は、弥生中期中葉以前から後期後葉にかけてはほぼ横ばいで、終末期にいたって若干の増加がみられるが、全体として少ない(図8)。周防での出土点数は、弥生中期後葉に第一のピークがあり、後期前葉から中葉を経て、後期後葉に至ると急増している(図9)。内訳は、後期後葉から終末期にかけては、鉄鏃が過半数を占めている。鉄斧は、板状鉄斧・袋状鉄斧とも見られるものの出土点数は少ない。

太田川流域・西条盆地などの安芸では、弥生後期中葉に出土点数が急増し、さらに後葉にかけて増加していく(図10)。内訳は、鉄鏃が多く、鉈・刀子などの工具がそれに次いでいる。鉄斧は、板状鉄斧・袋状鉄斧が見られるものの出土点数は少ない。ただし、広島市金平A地点遺跡の刃幅が5.0cmあるような大型の袋状鉄斧や広島県北広島町京野遺跡の完形の鑄造鉄斧、後述する墳墓副葬鉄器など、舶載品と考えられる鉄斧が散見される。

備中のうち北部の旧岡山県上房郡北房町・岡山県新見市を除いた備中南部、および備前では、弥生後期後葉に出土点数が急増する(図11)。このうち、弥生後期から終末期では、鉄鏃が最も多くを占め、鉈・刀子などの工具がこれに次ぐ。鉄斧は、板状鉄斧・袋状鉄斧が見られるものの出土点数が少なく、前者が弥生中期後葉に多いが、後期に入ると減少傾向にある。

一方、中国山地山間部の美作および、備中北部の旧岡山県上房郡北房町・岡山県新見市では、弥生後期初頭・前葉に出土点数が前時期から倍増しているが、それ以降は、終末期にかけて増減があり、大幅な増加傾向は窺えない(図12)。また、鉄鏃が高い比率を占めていた周防・安芸・備中南部・備前などの瀬戸内海側諸地域と比較すると、中国山地山間部では、鉈・刀子などの鉄製工具の比率が高い傾向にある。

以上のような諸地域の状況に対して、山陰では、弥生後期後葉に飛躍的に出土点数が増加しており(図13、会下2019)⁽⁹⁾、大きな傾向としては備中南部・備前の増減と類似している。器種内訳では、鉈・刀子・鉄斧が中期後葉以来、比較的高い比率を占めており、その点においては中国山地山間部と類似する。また瀬戸内海側諸地域の集落遺跡では、主に伐採斧として使用されたと推定される刃幅5.0cm前後を超えるような大型の板状鉄斧・袋状鉄斧はほとんどみられないのに対して、山陰では弥生中期後葉から多く認められる⁽¹⁰⁾。例えば、刃幅5.0cm前後以上の大型鉄斧事例として、弥生中期後葉では、島根県仁多郡奥出雲町国竹遺跡の板状鉄斧、島根県出雲市杉沢Ⅱ遺跡の袋状鉄斧、鳥取県西伯郡伯耆町長山馬籠遺跡の板状鉄斧・袋状鉄斧、鳥

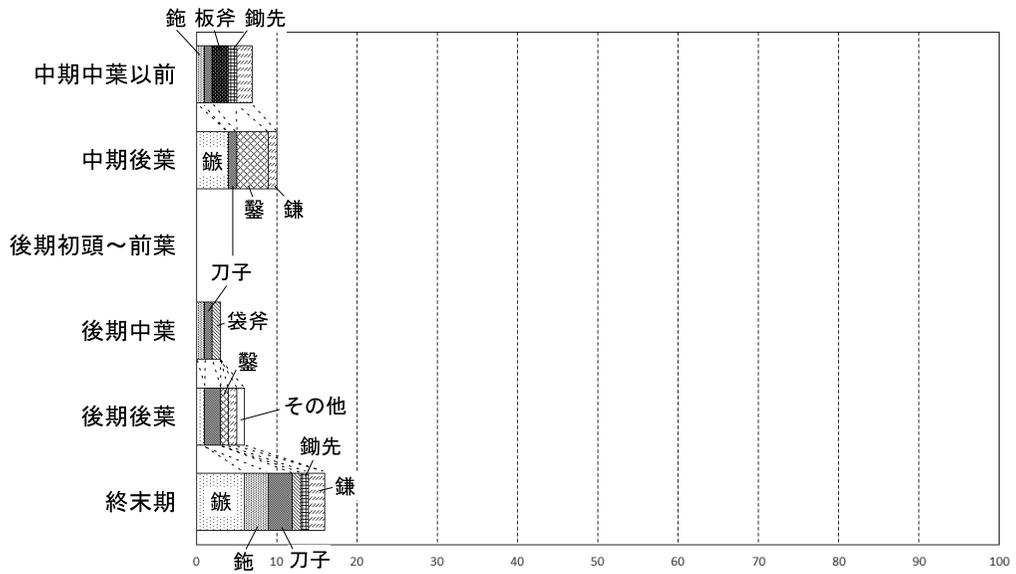


図8 弥生集落遺跡出土鉄器器種の時期別点数(長門)

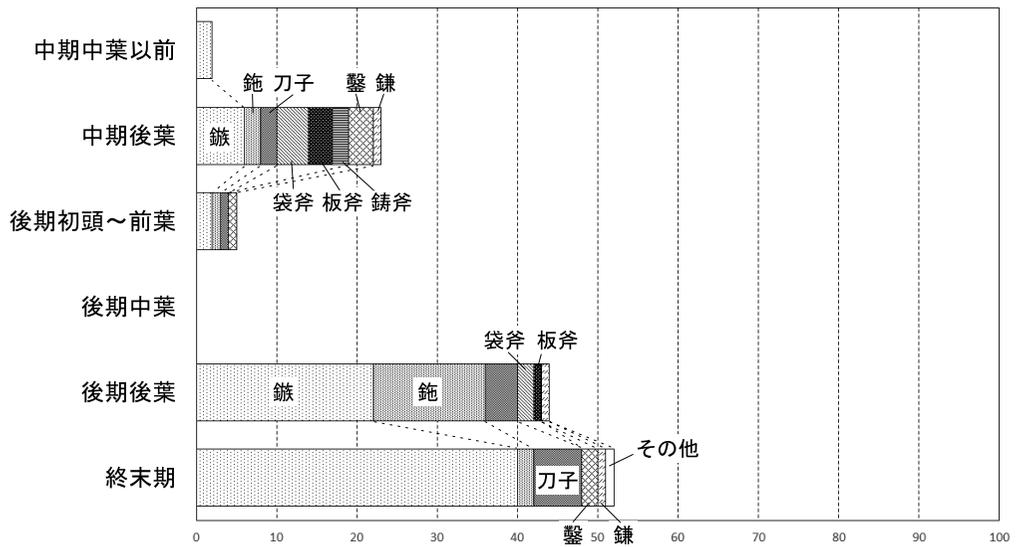


図9 弥生集落遺跡出土鉄器器種の時期別点数(周防)

弥生時代の中国地域における鉄器普及の様相

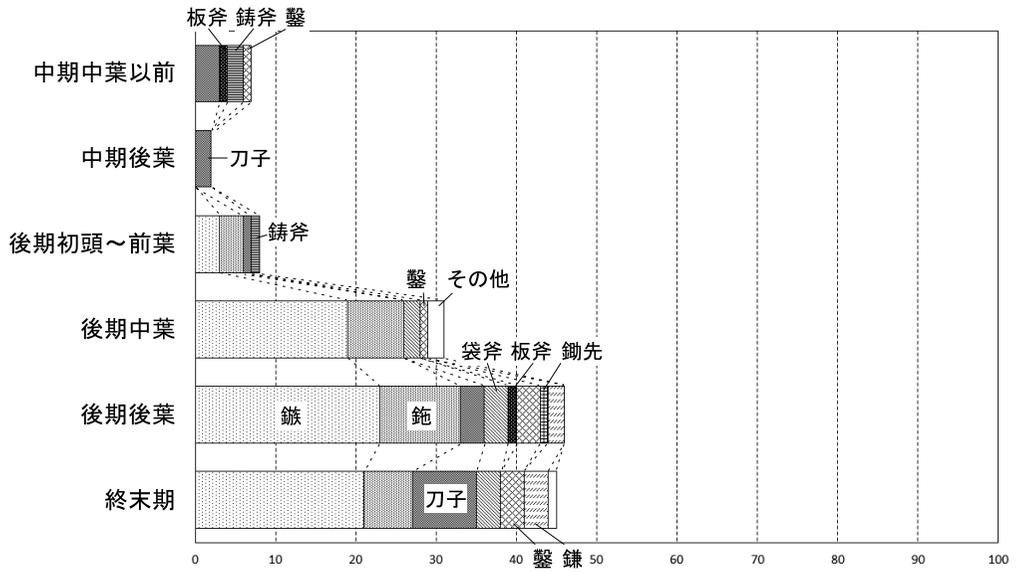


図10 弥生集落遺跡出土鉄器器種の時期別点数 (安芸)

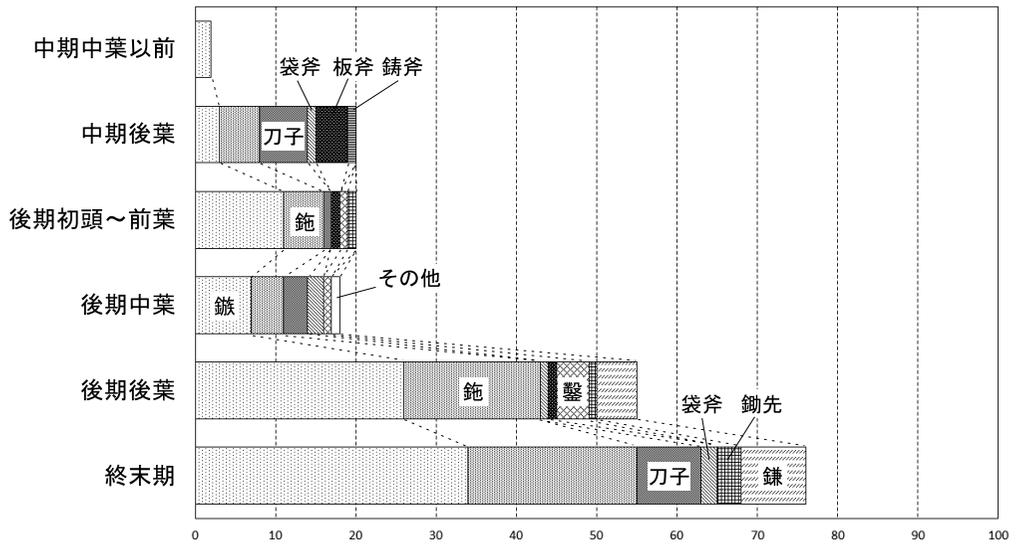


図11 弥生集落遺跡出土鉄器器種の時期別点数 (備中南部・備前)

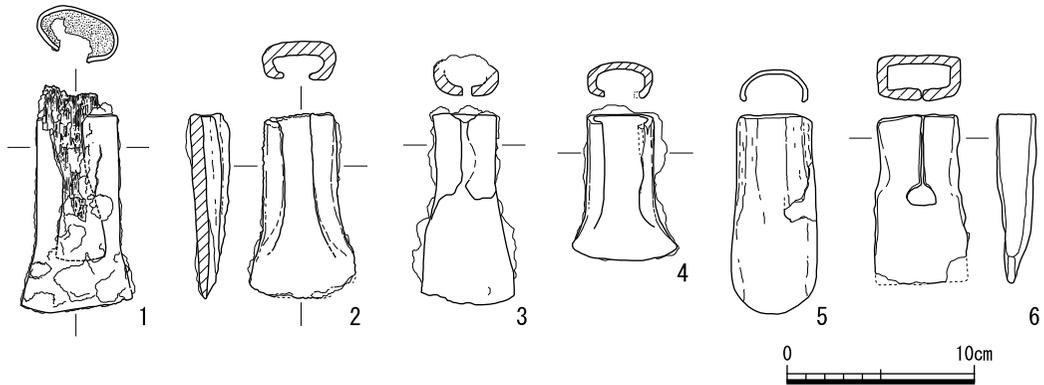


図14 刃幅5.0cm 前後以上の袋状鉄斧

- 1：鳥取県伯耆町長山馬竈遺跡（中期後葉） 2：鳥根県出雲市杉沢Ⅱ遺跡（中期後葉）
 3：鳥根県松江市田和山遺跡（～中期） 4：京都府与謝野町日吉ヶ丘遺跡（中期後葉）
 5：京都府京丹後市奈具岡遺跡（中期中～後葉） 6：鳥取県伯耆町越敷山遺跡群（後期中葉）

取市青谷上寺地遺跡の板状鉄斧、弥生後期から終末期では、鳥取県西伯郡伯耆町越敷山遺跡群Ⅳブロック・鳥取県東伯郡北栄町西高尾谷奥遺跡の袋状鉄斧などがある（図14）。また、松江市田和山遺跡の袋状鉄斧も弥生中期の可能性が高い。さらに、同じ日本海側の丹後でも京都府京丹後市奈具岡遺跡や京都府与謝郡与謝野町日吉ヶ丘遺跡で、弥生中期の刃幅5.0cm 以上の袋状鉄斧が出土している。弥生中期後葉頃の山陰から丹後におけるこうした大型袋状鉄斧は、この地域に偏在的に分布するようである。なお、以上のような大型鉄斧のうち板状手斧は、金属学的調査から含有炭素量の異なる鉄による「合せ鍛え」製品である事例が確認されており、朝鮮半島製と推定されている（大澤2000など）。

また、各地域の鉄鏃を形式別にみると表1の通りである。山陰では、大村分類（大村1983）における無茎三角形式が全体の約82.6%、柳葉式が約12.8%出土しており、無茎鉄鏃が大半である。安芸では、無茎三角形式が全体の約41.2%、柳葉式が約47.0%、備中南部・備前では、無茎三角形式が全体の約7.2%、柳葉式が約87.0%、備中北部・美作では、無茎三角形式が全体の約42.2%、柳葉式が約51.1%となる。備中南部・備前では柳葉式が大半だが、中国山地山間部の備中北部・美作は無茎式の比率が大きくなっていることは、山陰側からの影響を窺わせよう。また山陰では、身部の1箇所孔を有する無茎三角形式鉄鏃が、弥生後期前葉から終末期

表1 鉄鏃形式の内訳（%は概数）

	長門	周防	安芸	備後	備中南部 ・備前	備中北部 ・美作	山陰
無茎三角形式	4 (26.7%)	6 (12.5%)	21 (41.2%)	9 (81.2%)	5 (7.2%)	19 (42.2%)	90 (82.6%)
柳葉式	11 (73.3%)	37 (77.0%)	24 (47.0%)	1 (9.1%)	60 (87.0%)	23 (51.1%)	14 (12.8%)
有茎三角形式	0 (0%)	2 (4.2%)	1 (2.0%)	1 (9.1%)	1 (1.4%)	1 (2.2%)	5 (4.6%)
その他	0 (0%)	3 (6.3%)	5 (9.8%)	0 (0%)	3 (4.3%)	2 (4.4%)	0 (0%)
合計	15	48	51	11	69	45	109

にかけて散見される(池淵2000)。この単孔をもつ無茎三角形式鉄鏃が、旭川水系上流域の岡山県真庭市上野遺跡・同ヒロダン・小坂向遺跡で見られる点についても、山陰側からの影響を示唆しよう。

4 墓制との関連

本節では、上記でみてきた中国地域の弥生集落における鉄器の様相が、墓制にどのような影響を及ぼしているのかについて検討する。

貼石を伴う区画墓の分布と鉄器流通

中国地域に本格的に鉄器が分布するようになる弥生中期中葉から後葉にかけての特徴的な墓制として、墳丘に貼石を施した貼石方形墓や四隅突出型墳丘墓があげられる。現状の資料からみると、貼石方形墓は弥生中期中葉から後葉における山陰西部から丹後半島にかけての日本海沿岸部と中国山地山間部の三次盆地において、四隅突出型墳丘墓は弥生中期後葉における三次盆地・出雲平野などに出現している。こうした貼石を伴う区画墓の分布は、弥生中期中葉から後葉にかけての鉄器出土遺跡の分布と重なるようである。このような現象は、鉄器をはじめとした物資の広域的な流通が大きな背景となって、墓制に関する情報も遠隔地間を伝播した結果ではなかろうか。さらに踏み込むなら、こうした鉄器などの広域流通を掌握し主導したのが、貼石を施した区画墓に埋葬されるような上位階層の集団であった可能性も一考されよう。

集落での鉄器流通と墳墓での鉄器副葬

中国地域の集落遺跡で本格的に鉄器が分布するようになる弥生中期中葉から後葉頃において墳墓に副葬された鉄器の事例をみると、山口市朝田遺跡V区2号箱式石棺墓の袋状鉄斧1点、岡山県赤盤市四辻遺跡B地区方形台状墓第26土壙の鉄鏃1点があるにすぎない。中国地域において鉄鏃・鉞などの鉄器副葬事例が増加するのは、弥生後期中葉頃になってからである。すなわち、ある地域において鉄鏃・鉞といった鉄器が流通し、日常的な道具として使用され始めたとしても、必ずしもこれに即応して、同時併行的にそうした鉄器が副葬品に供された訳ではないことが分かる。以上の現象は、副葬品の内容が、あくまでその地域・時期における葬送集団が有する副葬様式に基づいて主体的に決定されたことを示している。

また、中国地域における区画墓の中心的埋葬墓には、弥生後期前葉の鳥取市松原1号墓を早い事例として、特に弥生後期中葉ないし後葉から鉄刀剣が副葬されるようになる。したがって、鉄刀剣のような大型鉄製武器副葬の時期も、日常道具である小型鉄器の流通時期とは対応していない。弥生時代の鉄刀剣は希少であり、特に長剣・大刀などの製作地は、製作技術からみて列島外であると考えられる。また、区画墓の中心的埋葬墓における副葬品が多いことは、被葬者が上位階層であることを象徴する器物であることを示している。こうした点からみると、鉄刀剣の流通形態は、上位階層集団間における贈与といった政治的な意味が含まれていたことを推定させる。したがって、集落における日常道具としての小型鉄器流通の質とは、やや次元を異にするものとして理解しておく必要がある。

上位階層墓の出現と鉄器流通

こうした一方で、冒頭でふれたように前稿では、西日本各地において鉄器普及の途上期にそ

の流通を掌握した首長の権威・権力が伸長し、大型区画墓造営につながったことを予察した(会下2019)。前節でみたように備中南部・備前では、岡山平野に鉄器出土遺跡の分布のまとまりがあり、弥生後期後葉の時期において飛躍的に出土量が増加している。この時期は、足守川下流域に直径約40mを測る大型区画墓の岡山県倉敷市楯築墳丘墓が造営される時期であり、鉄器流通量の増大との関連性が窺える(佐藤2002)。

同様に、太田川下流域でも鉄器出土遺跡の分布のまとまりがあり、弥生後期中葉や後葉に出土量が増加している。太田川下流域左岸の丘陵上には、弥生後期後葉から終末期頃になると竪穴式石槨を有し、舶載品とみられる長剣、完形の鑄造鉄斧、大型袋状鉄斧などの潤沢な鉄器が副葬される広島市西願寺山墳墓群や同梨ヶ谷1・2号墓が造営されている。これらは、大型区画をもつ墳墓ではないが、特別な埋葬施設や卓越した質・量の副葬鉄器を有する点からみると、上位階層集団の墳墓と推定される。山陰や岡山県南部では、大型区画墓でも鉄刀剣1点程度および玉類の副葬が一般的であるが、当地域のこうした墳墓は玉類副葬がみられない代わりに、鉄剣のほか複数点の鉄製大型農工具が副葬されるなど、鉄器副葬に傾斜するのが特徴的である。このような道具類を含めた鉄器に特化した副葬品内容は、被葬者や葬送集団が鉄器流通の掌握・差配に関係し、これらを潤沢に入手し消費しうる立場にあったことを連想させる。

集落で使用される鉄器、副葬品としての鉄器、それらの流通に関わる主体との関係については、まだ整理すべき点が残されている。ここでは、以上みてきたように、山陰と同様、瀬戸内海沿岸の諸地域でも集落における鉄器流通量の増大に呼応して、区画や埋葬施設・副葬品の内容において卓越性を有する上位階層墓が出現する傾向を確認しておきたい⁽¹¹⁾。

5 まとめと課題

本稿では、中国地域における弥生時代集落遺跡出土の鉄器の様相から、主に以下のことを指摘した。まず鉄器の分布から、日本海・瀬戸内海を東漸し臨海部集落へと向かう水運ルート、臨海河口部から内陸部へと向かう各主要河川遡上ルート、さらに中国山地山間部の東西を横断する各主要河川支流沿いの陸運ルートという鉄器流通のネットワークを具体的に想定した。周防・安芸および備中南部・備前では、弥生後期に鉄器出土量が増大していく大きな傾向が認められ、山陰とも共通する。出土量の内訳をみると、周防・安芸および備中南部・備前では鉄鍬の出土比率が高いのに対し、山陰では鉋・刀子などの工具の出土比率が高い傾向が窺えた。そのうえで、山陰と同様に瀬戸内海沿岸の諸地域でも集落における鉄器流通量の増大に呼応して、その流通を掌握した首長の権威・権力が伸長し、区画や埋葬施設・副葬品の内容において卓越性を有する階層上位墓が出現する傾向を読み取った。

なお本稿では、拠点集落と周辺集落の関係(田中1996)を等閑視し、両者を同列に扱った単純な分布論のもとに鉄器流通の考察を進めた。今後は、集落遺跡における他の考古資料も包括しながら、地域間における広域流通や地域内における再分配流通といった視点もふまえて、弥生時代の鉄器流通構造を解明していく必要がある。その他の課題として、さらに九州および近畿・北陸・東日本も俯瞰した鉄器の様相を検討し、弥生時代の日本列島における流通・消費の具体相を明らかにしていきたい。また、第4節で述べた鉄器の流通と墓制との関係につ

いての視点は、四隅突出型墳丘墓の北陸への東漸や大和盆地における前方後円墳の成立と伝播といった議論にも寄与しよう。もとより、鉄器流通が墓制の様相とどの程度関連性を有しているのかという根本的課題についても他視点からの検証が求められよう。以上の課題については、別稿で検討していきたい。

本稿は、島根大学法文学部山陰研究センター・山陰研究プロジェクト「既掘考古資料の集成検討および一括資料群の再検討による山陰地域社会の動態的研究(代表・平郡達哉島根大学法文学部准教授)」の成果、および2020年8月の島根県古代文化センター・テーマ研究「古代出雲と吉備の交流」検討会で発表した内容をもとにしている。共同研究メンバーの方々をはじめ、下記の皆様から有益なご教示を得た。記して感謝いたします。

赤澤秀則・池淵俊一・岩本崇・宇垣匡雅・大久保徹也・勝部智明・北島大輔・坂本豊治・清家章・高尾浩司・丹羽野裕・原田敏照・平郡達哉・松尾充晶・光本順(敬称略)

注

(1) 各地域における出土鉄器の所属時期は、伴出する土器の時期から推定した。土器の年代的位置付けは、蒲原2013などを加筆修正して作成した表2の通りである。蒲原2013の表では、各地域間における型式同士の併行関係に細かなズレが表現してある。しかし、本稿では鉄器分布の大きな変遷状況を捉えるため、論旨に影響がない限り、併行関係の厳密な差を捨象している。

表2 土器編年のおおまかな併行関係(蒲原2013などを参照して作成)

	長門	周防	安芸	備後	備中	備前	美作 (久田地域)	石見	出雲 隠岐	伯耆 因幡
中期中葉	中期Ⅱ～Ⅲ		Ⅲ-1～2	Ⅲ-1～2	Ⅲ-1～3	Ⅲ-1～2	7～9	Ⅲ-1～2	Ⅲ-1～2	Ⅲ-1～3
中期後葉	中期Ⅳ		Ⅳ-1～2	Ⅳ-1～2	Ⅳ-1～4	Ⅳ-1～2	10～12	Ⅳ-1～2	Ⅳ-1～2	Ⅳ-1～3
後期初頭 ～前葉	後期 Ⅰ-1～2	後期 Ⅰ-1～2 Ⅴ-2	Ⅴ-1～2	Ⅴ-1	Ⅴ-1～2	Ⅴ-1～2	13～14	Ⅴ-1	Ⅴ-1	Ⅴ-1
後期中葉	Ⅰ a～b	Ⅴ-3古	Ⅴ-3	Ⅴ-2	Ⅴ-3	Ⅴ-3	15	Ⅴ-2	Ⅴ-2	Ⅴ-2
後期後葉	Ⅱ	Ⅴ-3新	Ⅴ-4～5	Ⅴ-3	Ⅴ-4～5	Ⅴ-4	16	Ⅴ-3	Ⅴ-3	Ⅴ-3
終末期	Ⅲ a～b	Ⅴ-4 吹越式	Ⅱ-3	Ⅸ-c Ⅹ-a～b			17	Ⅴ-4	Ⅴ-4	Ⅵ-1 Ⅵ-2

長門：田畑2004・石井2000、周防：田畑2004・石井2004、安芸：妹尾1992・若島2002、備後：伊藤1992・高橋1983、備中：高畑1992・高橋1983、備前：正岡1992・高橋1983、美作：河合2005、石見・出雲・隠岐：松本1992、伯耆・因幡：清水1992。この他、大久保2002・田畑2012・田中2001なども参照。

- (2) ここであげた近世の出雲街道は、主に播磨国姫路から、佐用・津山・勝山・新庄・根雨・溝口・米子・安来などを經由して出雲国松江に至る街道のことを指す。
- (3) 近世出雲街道を介した山陰から播磨への鉄器流入の可能性は、すでに禰宜田佳男氏によっても言及されている(禰宜田2019：p.298)。
- (4) このことに関連して、やや飛躍するくらいがあるが、弥生中期末葉から後期初頭に埋納されたとみる説が有力な島根県雲南市加茂岩倉遺跡で出土した外縁付鈕1式の36号銅鐸が、岡山県勝田郡勝央町念仏塚銅鐸(山崎2002)と同范であることに注目しておきたい(角田2002など)。銅鐸という祭器の分

布の意味や流通経緯については不明な点が多いが、近世出雲街道ルートを通じた鉄器などの必需品流通に示唆されるような山陰と中国山地、さらに播磨方面との人・文物の往来を大きな背景として、出雲と美作の両地域に鋳型を共有する銅鐸が存在するという現象をとらえておきたいのである。

- (5) 弥生後期から終末期における備中北部・美作の土器型式をみると、甕を中心に山陰系の複合口縁をもつものが多く認められる(中山1981、高畑1992、河合2005など)。このことも、この地域と日本海側地域との密接な文物交流を反映していよう。
- (6) 中国山地の地質学的な発達過程を概観すると、現在の江の川以東では、中新世後期に東西方向に軸をもつ脊梁山地が隆起し、その南側の吉備高原域においても平行する東西方向軸の曲隆が起り、二つの隆起帯の狭間に位置する沈降部に断層盆地の三次・庄原盆地や津山盆地が形成される(小畑1991・pp46-66)。鉄器の分布に現れる交通ルートは、こうした中国山地の地形に規定されている。
- (7) すでに酒井龍一氏は、中国地域の弥生時代拠点集落の分布状況を分析し、中国山地山間部を東西に横断する「バイパス線c」とした流通ルートを想定している(酒井1990)。また、こうしたルート上には、鉄器だけでなく香川県産サヌカイト製石器も分布している(竹広2003)。
- (8) このような中国山地内陸部も包括した広域流通網の形成が、弥生時代の段階にすでに整っていたことは、後続する古墳時代前期において、山間部でも前方後円墳・前方後方墳が造営されるバックボーンになったといえる。例えば、広島県庄原市東城町大迫山1号墳は、古墳前期の撥形前方部をもつ全長45.5mの前方後円墳である。こうした古墳は、備中北部の高梁川水系最上流域と備後北部の庄原盆地とをつなぐ交通ルートの要衝であることを背景として造営されたことを想定させる。
- (9) 山陰の主要な拠点集落をみると、弥生後期後葉頃に竪穴住居数が増加しており、これに呼応して出土鉄器量も増加しているようである(高尾2015)。すなわち山陰では、一面において人口の増加による鉄器需要ないし消費量の拡大が出土量の増加につながっているようにみえる。一方、岡山県南部では弥生中期末から後期前葉頃に竪穴住居数増加の第一波があり、その後の増減を経たのち、古墳時代初頭に住居数ピークの第二波が認められる(重根2002)。この様相は、弥生後期後葉に急増する鉄器出土点数とは必ずしも対応していないようである。したがって、各地域における鉄器出土点数の増減は、人口数に伴う消費地の需要の増減に起因する場合と供給や流通の環境に左右される場合とが考えられる。この課題については、朝鮮半島南部および九州北部の状況も踏まえて再検討する必要がある。
- (10) ただし、刃幅5.0cm以上の大型板状鉄斧は、弥生中期後葉を中心に、九州から関東南部にかけて分布しているので(北口2010)、将来的に瀬戸内海側地域でも出土事例が若干増える可能性はあろう。
- (11) ただし、島根県出雲市西谷3号墓などの大型区画墓が造営される弥生後期後葉は、山陰全体でみた場合には鉄器出土量が倍増しているが(会下2019)、この時期の出雲平野や斐伊川・神戸川流域に限ってみた場合には鉄器出土量が少ないという問題がある。これについては、出雲平野における竪穴住居跡の検出事例ないし残存事例が比較的少ないこと、前後の時期の鉄器出土事例、朝鮮半島産瓦質土器などにみられる鉄器以外の舶載品の豊富な出土事例などから、総合的に考察していく必要がある。筆者は、これらを総合的に判断した場合、やはり出雲平野が様々な広域流通の拠点であったと考えている。

参考文献

- 池淵俊一 2000「島根県下における弥生時代鉄器の様相」『月刊考古学ジャーナル』No.467 pp.8-13
石井龍彦 2000「山口県西部の弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器について」『陶埴』第13号 山口

県埋蔵文化財センター pp.23-33

- 石井龍彦 2004「山口県東部(周防)の弥生時代後期の土器について」『陶埴』第17号 山口県埋蔵文化財センター pp.29-44
- 石田爲成 2013「山陰地方における塩町甕の分布について」『立命館大学考古学論集』VI pp.123-130
- 伊藤 実 1992「備後地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.155-238
- 伊藤 実 2005「四隅突出型墳丘墓と塩町式土器-四隅突出の思想とその背景-」『考古論集-川越哲志先生退官記念論集』川越哲志先生退官記念事業会 pp.375-398
- 上梶 武 2005「弥生時代の鉄器生産」『夏栗遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告194 岡山県教育委員会 pp.626-629
- 会下和宏 2019「弥生時代の山陰地域における鉄器普及の様相」『山陰研究』第12号 pp.1-27
- 大久保徹也 2002「中国・四国地方の土器」『考古資料大観 弥生・古墳時代の土器Ⅱ』小学館 pp.107-168
- 大澤正己 2000「島根県国竹遺跡出土板状鉄胎の金属学的調査」『島根考古学会誌』第17集 pp.145-164
- 大村 直 1983「弥生時代における鉄鎌の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号 pp.71-90
- 小畑 浩 1991『中国地方の地形』古今書院
- 角田徳幸 2002「銅鐸の検討」『加茂岩倉遺跡』島根県教育委員会・加茂町教育委員会 pp.292-309
- 蒲原宏行 2013「西日本における弥生土器諸様式の併行関係」『弥生時代政治社会構造論』雄山閣 pp.85-100
- 河合 忍 2005「弥生時代」『夏栗遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告194 岡山県教育委員会 pp.669-676
- 川越哲志 1993「弥生時代の鉄斧と鉄鉞」『考古論集-潮見浩先生退官記念論集-』潮見浩先生退官記念事業会 pp.397-432
- 川越哲志編 2000『弥生時代鉄器総覧(東アジア出土鉄器地名表Ⅱ)』広島大学文学部考古学研究室
- 北口聡人 2010「弥生時代大型板状鉄斧の検討」『遠古登攀 遠山昭登君追悼考古学論集』遠古登攀刊行会 pp.203-230
- 酒井龍一 1990「中国地方・弥生セトルメントシステム」『奈良大学紀要』第18号 pp.82-88
- 佐藤寛介 2002「岡山県域における弥生時代鉄器の様相」『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集-』下巻 古代吉備研究会 pp.1-18
- 佐藤寛介 2004「鉄器について」『久田原遺跡・久田原古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184 岡山県教育委員会ほか pp.648-649
- 重根弘和 2002「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集-』上巻 古代吉備研究会 pp.343-362
- 清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.355-412
- 妹尾周三 1992「安芸地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.239-315
- 高尾浩司 2015「鉄器の流通・保有状況からみた山陰弥生集落」『古代文化』第67巻第1号 pp.83-92
- 高橋 護 1983「山陽」『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社 pp.135-174
- 高畑知功 1992「備中地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.79-153
- 竹広文明 2003「弥生時代におけるサヌカイト利用と石器製作」『サヌカイトと先史社会』溪水社 pp.254-288
- 田中義昭 1996「弥生時代拠点集落の再検討」『考古学と遺跡の保護 甘粕健先生退官記念論集』甘粕健先生退官記念論集刊行会 pp.101-118

- 田中義昭 2001「沖丈遺跡出土の弥生土器」『沖丈遺跡』邑智町教育委員会 pp.336-375
- 田畑直彦 2004「周防・長門における弥生時代中期の土器と併行関係」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 pp.51-74
- 田畑直彦 2012「周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年」『山口大学埋蔵文化財資料館年報』6巻 山口大学埋蔵文化財資料館 pp.263-268
- 中山俊紀 1981「土器編年について」『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告10 津山市教育委員会 pp.108-121
- 福宜田佳男 2019『農耕文化の形成と近畿弥生社会』同成社
- 野島 永 1993「弥生時代鉄器の地域性-鉄鏃・鉋を中心として」『考古論集-潮見浩先生退官記念論集-』潮見浩先生退官記念事業会 pp.433-454
- 野島 永 2010「弥生時代における鉄器保有の位置様相-九州・中国地方の集落遺跡を中心として-」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 pp.41-54
- 正岡睦夫 1992「備前地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.3-78
- 村上恭通 1998「鉄器普及の諸段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7～9年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 pp.64-142
- 村田裕一 2007「山口県域における弥生時代鉄器の諸相」『やまぐち学の構築』第3号 pp.17-38
- 山崎 修 2002「念仏塚銅鐸」『加茂岩倉遺跡』島根県教育委員会・加茂町教育委員会 pp.215-218
- 若島一則 2002「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌』I 広島市文化財団 pp.30-53

遺跡文献(山陰は会下2019を参照のこと)

- 【長門】** 秋根：伊藤輝雄ほか 1977『秋根遺跡』下関市教育委員会／綾羅木郷：伊藤輝雄編 1981『綾羅木郷遺跡発掘調査報告Ⅰ』下関市教育委員会／北迫：小野忠熙ほか 1968「北迫集落遺跡」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会 pp.90-102／神田：福坂通恭編 1990『神田遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第127集 (財)山口県教育文化財団ほか／下七見：村岡和雄ほか 1989『下七見遺跡Ⅰ』菊川町教育委員会、宝川昭男編 1992『下七見遺跡Ⅱ』菊川町教育委員会／突抜：渡辺一雄編 1985『よみがえる弥生の村突抜・馬場遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第87集 山口県教育委員会／中村：岩崎仁志編 1987『中村遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第100集 山口県教育委員会／新張：村岡和雄ほか 2000『新張遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第20集 山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター／羽波：乗安和二三編 1989『羽波遺跡・片山遺跡』山口県教育委員会／宝蔵寺：宝川昭男編 1993『宝蔵寺遺跡』豊浦町教育委員会／宮の馬場：山本博ほか 1975『長門・大井』大阪学院大学／妙徳寺山：石井龍彦 1992『妙徳寺山遺跡』山陽町教育委員会／向日山：村岡和雄編 1987『向日山遺跡』豊浦町教育委員会／山の神：富士榮勇 1992「山の神遺跡の発掘調査」『豊浦町史3(考古編)』豊浦町教育委員会 pp.206-214、佐々木稔・赤沼英男 1992「山口県豊浦町山の神遺跡出土の鑄造製鋤先」『豊浦町史3(考古編)』豊浦町教育委員会 pp.215-223
- 【防府】** 朝田：柴崎文男ほか 1982『国道9号山口バイパス朝田墳墓群Ⅴ』山口県埋蔵文化財調査報告第64集 山口県教育委員会ほか、柴崎文男ほか 1983『国道9号山口バイパス朝田墳墓群Ⅵ』山口県埋蔵文化財調査報告第69集 山口県教育委員会ほか、村岡和雄ほか 1986『朝田墳墓群Ⅶ』山口県埋蔵文化財調査報告書第89集 山口県教育委員会／井上山：乗安和二三ほか 1979『井上山』井上山遺跡発掘調査団／円光寺：石井龍彦ほか 1987『円光寺遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第105集 山口県教育委員会／

追迫：石井龍彦ほか 1988『追迫遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第107集 山口県教育委員会ほか／**岡原**：小野忠熙 1961『山口県文化財概要4』山口県教育委員会 pp.10-15／**岡山**：小野忠熙編 1953『島田川』山口大学島田川遺跡学術調査団、前田耕次ほか 1987『岡山遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第99集 山口県教育委員会ほか／**奥ヶ原**：和田吉行編 1992『奥ヶ原遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第150集 山口県教育財団ほか／**御屋敷山**：柿本春次ほか 1974『御屋敷山遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第25集 山口県教育委員会／**上東**：田畑直彦ほか 2001『上東遺跡 弥生時代遺物編』山口市埋蔵文化財調査報告第77集 山口市教育委員会／**小谷**：小野実ほか 1995『小谷遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第175集 山口県教育委員会ほか／**清水**：石井龍彦編 1989『清水遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第118集 山口県教育委員会ほか／**下東**：磯部貴文 1992『下東遺跡Ⅱ』山口市教育委員会／**中院**：西尾健司編 2003『中院遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第36集 山口県埋蔵文化財センター／**天王**：谷口啓一編 1988『天王遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第108集 山口県教育委員会ほか／**土井**：渡辺一雄ほか 1990『土井遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第129集 山口県教育財団／**畑岡**：今地正紀編 1990『畑岡遺跡』山口県教育委員会ほか、森原清編 1991『畑岡遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財調査報告第135集 山口県教育委員会ほか／**吹越**：小野忠熙 1971『吹越遺跡予備調査概報』平生町教育委員会、山本一郎ほか 1974『吹越遺跡第2次調査概報』平生町教育委員会ほか／**松尾**：向直也ほか 1984「平生町松尾遺跡の発掘調査」『西部瀬戸内における弥生文化の研究』山口大学人文学部考古学研究室 pp.55-82／**右田・一丁田**：山本一郎ほか 1973『右田・一丁田遺跡 的場・宮の馬場遺跡 久米市遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第19集 山口県教育委員会／**明地**：岩崎仁志ほか 1993『明地遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第162集 山口県教育財団ほか、岩崎仁志ほか 1994『明地遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財調査報告第167集 山口県教育財団ほか／**吉政**：豊島正行編 1996『吉政遺跡』山口県教育財団埋蔵文化財調査報告第1集 山口県教育財団

【安芸】大久保：松岡美緒 1992『大久保遺跡発掘調査報告』広島市歴史科学教育事業団調査報告書第7集 広島市歴史科学教育事業団／**大槓3号**：道上康仁編 1985『大槓遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集 広島県埋蔵文化財調査センターほか／**奥田大池**：道上康仁ほか 1983『奥田大池遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター／**金平A地点**：脇坂光彦 1977「金平A地点遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会 pp.43-45／**京野**：坂本一志 1998『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第160集 広島県埋蔵文化財調査センター／**串山城**：荒川正己ほか 1995『串山城遺跡発掘調査報告』広島市歴史科学教育事業団調査報告書第16集 広島市歴史科学教育事業団／**倉重2号**：藤田広幸 1987『月見城遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第54集 広島県埋蔵文化財調査センター／**倉重向山**：稲葉瑞穂編 1991『倉重向山遺跡発掘調査報告』広島市歴史科学教育事業団調査報告書第1集 広島市歴史科学教育事業団／**弘住**：石田彰紀編 1983『弘住遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第25集 広島市教育委員会／**鴻の巣南**：河瀬正利・藤野次史編 1995『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報XⅡ』広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会／**高陽台A地点**：中村真哉ほか 1982『高陽台遺跡群発掘調査報告』広島市の文化財第21集 広島市教育委員会／**小林**：廣本喜稔ほか 1990『小林遺跡A・B地点遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第46集 広島市教育委員会／**西願寺**：金井亀喜編 1974『西願寺遺跡群 広島市高陽町矢口所在遺跡群の調査概報』広島県教育委員会／**笹利迫田**：銀治益生ほか 1985『笹利迫田遺跡発掘調査報告』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第37集 広島県埋蔵文化財調査センター／**下沖5号**：若島一則ほか 1988『一般県道原田五日市線(石内バイパス)道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』広島市の文化財第41集 広島市教育委員会／**浄安寺**：植田

千佳穂編 1986『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第47集 広島県埋蔵文化財調査センター／**城ノ下A地点**：若島一則編 1991『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告』広島市歴史科学教育事業団調査報告書第2集 広島市歴史科学教育事業団／**浄福寺1号**：妹尾周三編 1993『東広島ニュータウン遺跡群Ⅲ(本文編)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第106集 広島県埋蔵文化財調査センター／**浄福寺2号**：佐々木直彦ほか 1992『東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ(図版編)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第75集 広島県埋蔵文化財調査センター、鍛冶益生ほか 1993『東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ(本文編)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第75集 広島県埋蔵文化財調査センター／**水晶城**：植田千佳穂編 1986『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第47集 広島県埋蔵文化財調査センター／**末光**：橋本義和編 1984『末光遺跡群発掘調査報告』広島市の文化財第28集 広島市教育委員会／**鯛之迫**：山脇一幸編 2001『鯛之迫遺跡』広島市文化財団発掘調査報告書第7集 広島市文化財団／**大明地**：植田千佳穂ほか 1987『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第55集 広島県埋蔵文化財調査センター／**峠谷**：沢元保夫編 1983『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第19集 広島県埋蔵文化財調査センター／**壘谷**：嶋田滋 1983『広島県文化財調査報告』第14集 広島県教育委員会／**段之原山**：若島一則 2006『段之原山遺跡』広島市文化財団発掘調査報告書第14集 広島市文化財団／**寺迫**：松垣栄次 1977『寺迫遺跡』『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会 pp.160-177／**寺山**：高下洋一編 1997『寺山遺跡発掘調査報告』広島市歴史科学教育事業団調査報告書第19集 広島市歴史科学教育事業団／**トンガ坊城**：榎木敬太ほか 2012『トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡』広島市未来都市創造財団発掘調査報告書第1集 広島市未来都市創造財団／**中畦**：中村真哉ほか 1984『中畦遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第29集 広島市教育委員会／**中山**：川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣／**中屋B地点**：三枝健二 1999『中屋遺跡B地点発掘調査報告Ⅱ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第181集 広島県埋蔵文化財調査センター／**梨ヶ谷**：荒川正巳 1998『梨ヶ谷遺跡発掘調査報告』広島市歴史科学教育事業団／**西2・8地点**：脇坂光彦編 1993『東広島ニュータウン遺跡群Ⅴ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第107集 広島県埋蔵文化財調査センター／**西本2号**：東広島市教育委員会 1976『西本遺跡群 D・E・F地点 図版編』／**西本6号**：川吉謙二編 1995『西本6号遺跡発掘調査報告』淡神文化財協会、篠原芳秀ほか 1997『西本6号遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第143集 広島県埋蔵文化財調査センター／**稗畑**：福原茂樹 1992『稗畑遺跡発掘調査報告』広島市歴史科学教育事業団調査報告書第4集 広島市歴史科学教育事業団／**毘沙門台東遺跡B・C地点**：大崎尚吾編 1990『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第48集 広島市教育委員会／**成岡A地点**：荒川正巳ほか 2001『成岡A地点遺跡』広島市文化財団発掘調査報告書第6集 広島市文化財団／**広島経済大学構内遺跡群長う子**：松垣栄次 1984『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』広島市の文化財第30集 広島市教育委員会／**三谷**：榎木敬太編 2006『三谷遺跡』広島市文化財団発掘調査報告書第13集 広島市文化財団、田村規充編 2010『三谷遺跡第2次調査』広島市文化財団調査報告書第13集附編 広島市文化財団／**真亀G地点**：松村昌彦 1977『真亀G地点遺跡』『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会 pp.98-104／**柳**：榎木敬太ほか 2012『トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡』広島市未来都市創造財団発掘調査報告書第1集 広島市未来都市創造財団

【備後】浅谷山東A地点：植田広 1990『浅谷山東A地点遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第85集 広島県埋蔵文化財調査センター／**茜ヶ峠**：松村昌彦編 1985『石鎚権現遺跡群・茜ヶ峠遺

跡発掘調査報告』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第39集 広島県埋蔵文化財調査センター／**石鎚権現**：青山透ほか 1981『石鎚権現遺跡群発掘調査報告』広島県埋蔵文化財調査センター、伊藤実 1985『石鎚権現遺跡群発掘調査報告 C地点』広島県埋蔵文化財調査センター、松村昌彦編 1985『石鎚権現遺跡群・茜ヶ峠遺跡発掘調査報告』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第39集 広島県埋蔵文化財調査センター／**大迫山1号墳**：川越哲志編 1989『大迫山第1号古墳発掘調査概報』東城町教育委員会・広島大学文学部考古学研究室／**大原1号**：桧垣栄次 1978「大原1号遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告I』広島県教育委員会 pp.9-35／**岡山A地点**：篠原芳秀編 1994『岡山A地点遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第126集 広島県埋蔵文化財調査センター／**御領**：藤昭嗣 1982『神辺町埋蔵文化財調査報告II』神辺町教育委員会／**サコ田**：恵谷泰典編 1991『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VI』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第91集 広島県埋蔵文化財調査センター／**城山D**：花本哲志編 1996『城山』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第137集 広島県埋蔵文化財調査センター／**曾川1号**：鍛冶益生 2008『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告5』広島県教育事業団発掘調査報告書23 広島県教育事業団／**手坊谷**：金井亀喜編 1976『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会／**油免**：出野上靖ほか 2003『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第202集 広島県埋蔵文化財調査センター／**和田原D地点**：稲垣寿彦ほか 1999『和田原D地点遺跡』庄原市教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センターほか

【備中】足守川加茂A・足守川加茂B・足守川矢部南向：河本清ほか 1995『足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94 岡山県教育委員会／**大木**：江見正己編 1996『宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群・粧田山城跡・大村遺跡ほか』岡山県教育委員会ほか／**奥坂**：高畑知功ほか 1983『天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告53 岡山県教育委員会／**川入**：柳瀬昭彦ほか 1977『川入・上東』岡山県教育委員会／**窪木**：岡山博編 1997『窪木遺跡1』岡山県教育委員会／**黒住・雲山**：中野雅美編 1994『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県教育委員会ほか／**五万原**：間壁忠彦ほか 1968「岡山県美屋町五万原遺跡」『倉敷考古館研究集報』第5号 倉敷考古館 pp.1-28／**菰池**：下澤公明ほか 1988『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71 岡山県教育委員会／**上東**：伊藤晃ほか 1974「上東遺跡の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査II』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2 岡山県教育委員会 pp.97-235、柳瀬昭彦ほか 1977『川入・上東』岡山県教育委員会／**新市谷**：井上弘ほか 1977「新市谷遺跡の調査」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査9』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15 岡山県教育委員会 pp.371-415／**高塚**：江見正己ほか 2000『高塚遺跡・三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150 岡山県教育委員会／**高越**：高田知樹 2004『高越遺跡』井原市埋蔵文化財発掘調査報告2 井原市教育委員会／**竹林寺天文台**：水田貴士ほか 2017『竹林寺天文台遺跡2』浅口市埋蔵文化財発掘調査報告3 浅口市教育委員会／**忠田山**：福田政継ほか 1978「忠田山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査13』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告23 岡山県教育委員会 pp.551-638／**津寺**：大橋雅也編 1995『津寺遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 岡山県教育委員会ほか、亀山行雄編 1996『津寺遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 岡山県教育委員会ほか／**津寺一軒屋**：高畑知功編 1999『津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告142 岡山県教育委員会／**天神坂**：高畑知功ほか 1983『天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告53 岡山県教育委員会／**西江**：正岡陸夫ほか 1977「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会 pp.173-463／**西山(倉敷市)**：山麿康平ほか 1979『西山遺跡』岡山県教育委員会／**西山(総社**

市)：江見正己編 1997『藪田古墳群・金黒池東遺跡・奥ヶ谷窯跡・中山遺跡・中山古墳群・西山遺跡・西山古墳群・服部遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡・高松田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121 岡山県教育委員会ほか／**南溝手**：平井泰男編 1996『南溝手遺跡2』岡山県教育委員会／**桃山**：田仲満雄ほか 1976「桃山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12 岡山県教育委員会 pp.315-550／**矢部古墳群**：井上弘 1993『山陽自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県教育委員会

【備前】**伊福定国前**：杉山一雄編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125 岡山県教育委員会／**大池尻**：畑地ひとみ 2017『大池尻遺跡』赤磐市文化財調査報告10 岡山県赤磐市教育委員会／**大岩**：伊藤晃ほか 1998『大岩遺跡・田益田中遺跡・白壁奥遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告128 岡山県教育委員会／**雄町**：伊藤晃編 1972『山陽新幹線建設に伴う調査』岡山県埋蔵文化財調査報告1 岡山県教育委員会／**貝殻山**：小野昭 1977「岡山県貝殻山遺跡」『日本考古学年報』28 pp.58-61／**才地**：柳瀬昭彦ほか 2004『八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡・岡遺跡・小坂古墳群・才地古墳群・才地遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告178 岡山県教育委員会／**齊富**：下澤公明編 1996『齊富遺跡』岡山県教育委員会ほか／**塩納成**：杉山一雄ほか 2005『塩納成遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告187 岡山県教育委員会／**下笠加**：金田善敬 1997『下笠加遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告122 岡山県教育委員会／**田益田中**：伊藤晃ほか 1998『大岩遺跡・田益田中遺跡・白壁奥遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告128 岡山県教育委員会／**原**：正岡陸夫ほか 1988『原遺跡』御津町教育委員会／**百間川兼基**：高畑知坊編 1982『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県教育委員会ほか／**百間川沢田**：平井泰男ほか 1981『旭川(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県教育委員会ほか、柳瀬昭彦・澤山孝之編 1997『百間川兼基遺跡3・百間川今谷遺跡3・百間川沢田遺跡4』岡山県教育委員会ほか』岡山県教育委員会ほか／**百間川原尾島**：光吉勝彦ほか 1980『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39 岡山県教育委員会ほか、正岡陸夫ほか 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 岡山県教育委員会ほか、宇垣匡雅編 1994『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 岡山県教育委員会ほか、平井勝編 1995『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 岡山県教育委員会ほか、柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 岡山県教育委員会ほか／**船山**：泉本和秀ほか 1972「船山遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告 山陽新幹線建設に伴う調査』岡山県教育委員会 pp.31-54／**南方**：柳瀬昭彦ほか 1977『川入・上東』岡山県教育委員会、柳瀬昭彦ほか 1981『南方遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告40 岡山県教育委員会／**門前池**：枝川陽ほか 1975『門前池遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9 岡山県教育委員会／**四辻**：神原英朗編 1971「四辻古墳群第5号墳・四辻土壙墓群」『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群他方形台状墓発掘調査概報3編』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第3集 山陽町教育委員会 pp.69-139

【美作】**穴が途**：上椋武ほか 2008『八幡山遺跡・八幡山南遺跡・八幡山円明寺跡・尾崎遺跡・中町B遺跡・穴が途遺跡・穴が途古墳・今岡D遺跡・今岡中山遺跡・今岡古墳群・高岡遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告213 岡山県教育委員会／**有本**：小郷利幸ほか 1998『有本遺跡・男戸嶋古墳・上遠戸嶋遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告62 津山市教育委員会ほか／**今岡中山**：穴が途遺跡と同じ／**上野**：山麿康平編 1994『元定古墳群・上野遺跡・大内原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91 岡山県教育委員会ほか／**上部**：安田豊史 1990『上部遺跡発掘調査報告』津山市教育委員会／**大田十二社**：中山俊紀 1981『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告10 津山市教育委員会／**大畑**：行田裕美 1993『大畑遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告47 津山市教育委員会ほか／**大開**：平岡正宏編 1994

『津山市大開古墳群・大開遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告51 津山市教育委員会／**男戸嶋**：安川豊史ほか 1999『有元遺跡・男戸嶋遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集 津山市教育委員会／**釜田南**：村上幸雄編 1979『椽山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会／**草加部稲荷**：中山俊紀 1981『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告10 津山市教育委員会／**草加部鮎込**：安川豊史 1978「草加部鮎込遺跡(第1次)」『日本考古学年報』29 p.239／**久田原**：江見正己編 2004『久田原遺跡・久田原古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184 岡山県教育委員会／**久田堀ノ内**：弘田和司編 2005『久田堀ノ内遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192 岡山県教育委員会／**荒神峪**：小郷利幸ほか 1999『荒神峪遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告64 津山市教育委員会／**小中**：粟野克己ほか 1975「小中古墳群・小中遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7 岡山県教育委員会 pp.64-327、浅倉秀昭編 1997『小中遺跡・白途古墳群・小中古墳群・湯ヶ途古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告117 岡山県教育委員会／**小原**：行田裕美ほか 1991『小原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告38 津山市教育委員会ほか／**椽山**：村上幸雄編 1979『椽山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会／**惣台**：福田正継ほか 1999『旦山遺跡・惣台遺跡・野辺張遺跡・先旦山遺跡・旦山古墳群・奥田古墳・水神ヶ峪遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136 岡山県教育委員会／**田井たれをず**：光永真一ほか 2003『田井たれをず遺跡・田井ちご池遺跡・岡東高塚遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告171 岡山県教育委員会／**高岡**：穴が途遺跡と同じ／**竹田墳墓群**：中島健爾ほか 1984『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会／**田邑丸山**：小郷利幸ほか 2000『田邑丸山古墳群・田邑丸山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告67 津山市教育委員会／**旦山**：惣台遺跡と同じ／**塚の平古墳群**：村上幸雄編 1979『椽山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会／**東蔵坊**：安川豊史編 1981『東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告9 津山市教育委員会／**堂の前**：平井泰男 1989『堂の前遺跡』美甘村教育委員会／**夏栗**：中野雅美ほか 2005『夏栗遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告194 岡山県教育委員会／**ナル林**：江見正己編 2003『河内構遺跡・河内城跡・河内遺跡・ナル林遺跡・久田上原城跡・北条高下遺跡・峪畑遺跡・岡遺跡・比丘尼ヶ城』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170 岡山県教育委員会／**西原**：橋本惣司ほか 1973「西原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6 岡山県教育委員会 pp.133-216／**西吉田**：行田裕美編 1985『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告17 津山市教育委員会／**二宮大成**：山麿康平ほか 1973「二宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』岡山県教育委員会／**二宮岡東**：小郷利幸ほか 2000『二宮岡東遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告68 津山市教育委員会／**沼**：近藤義郎ほか 1952『津山弥生式住居群の研究』津山郷土館考古学研究報告第2冊 津山市・津山郷土館／**八幡山南**：穴が途遺跡と同じ／**ビシャコ谷**：行田裕美編 1984『ビシャコ谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告16 津山市教育委員会／**ヒロダン・小坂向**：杉山一雄ほか 2003『小坂向城山城跡・ヒロダン・小坂向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告176 岡山県教育委員会／**福田A**：森田安子編 1983『福田A遺跡・高屋B遺跡』落合町教育委員会／**船山**：泉本和秀ほか 1972「船山遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告1』岡山県教育委員会／**向林**：安川豊史 1989『向林遺跡・中鎌田墳墓』津山市埋蔵文化財発掘調査報告29 津山市教育委員会／**元定古墳群**：山麿康平編 1994『元定古墳群・上野遺跡・大内原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91 岡山県教育委員会ほか

【播磨】小神芦原：岸本道昭ほか 1993『小神芦原遺跡』龍野市文化財調査報告10 龍野市教育委員会／**新宮宮内**：松本正信ほか 1982『新宮・宮内遺跡』新宮町文化財調査報告3 新宮町教育委員会

【丹後】奈具岡：野島永・河野一隆 1997「奈具岡遺跡(第7・8次)」『京都府遺跡調査概報』第76冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.30-82／**日吉ヶ丘**：加藤晴彦編 2005『日吉ヶ丘遺跡』加悦町文

化財調査報告第33集 加悦町教育委員会

【山陰】越敷山：中原斉編 1992『越敷山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会／**杉沢Ⅱ**：景山このみ編 2016『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』出雲市の文化財報告31 出雲市教育委員会／**田和山**：落合昭久編 2005『田和山遺跡』松江市文化財調査報告書第99集 松江市教育委員会・松江市教育文化振興財団／**長山馬籠**：中原斉ほか 1989『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会

図14出典（一部改変などのうえ，再トレース）

1：中原ほか1989 図200-F599／2：景山2016 図152-4／3：落合編2005 図59-661／4：加藤編2005 図59-688／5：野島・河野1997 図67-1／6：中原編1992 図324-839

A Study on the spread of iron implements in the Chugoku region during the Yayoi period

EGE Kazuhiro
(Shimane University Museum)

[Abstract]

This study aimed to discover the phase of the Yayoi period that saw the spread of iron implements in the Chugoku region. To do so, it analyzes the spread of the distribution of settlement remains from which iron implements were excavated and describes the composition and quantity of such tools in each phase. The results show that the iron implements' distribution network includes one route up the main rivers from the Sea of Japan and the Seto Inland Sea, as well as an east-west route, which crossed each water system of the Chugoku Mountains inland. In Suo, Aki, southern Bicchu, Bizen, and Sanin, the quantity of iron implements increased at the end of the Yayoi period. The ratio of iron arrowheads was high in Suo, Aki, southern Bicchu, and Bizen, but on the other hand, the ratio of iron industrial tools such as spear-style planning tools and knives was high in Sanin. The results show that the increase in iron implements impacted the emergence of the tombs of the chiefs, such as with the abundant grave goods and large-scale grave mounds. This is because the chiefs' power increased when they controlled the distribution of the iron implements.

Keywords: Yayoi period, iron implements, Chugoku region, settlement remains, burial system